

酒の追憶

太宰治

酒の追憶とは言っても、酒が追憶するという意味ではない。酒についての追憶、もしくは、酒についての追憶ならびに、その追憶を中心にしたもろもろの過去の私の生活形態についての追憶、とでもいったような意味なのであるが、それでは、題名として長すぎるし、また、ことさらに奇をてらったキザなもののような感じの題名になることをおそれて、かりに「酒の追憶」として置いたまでの事である。

私はさいきん、少しからだの調子を悪くして、神妙にしばらく酒から遠ざかっていたのであるが、ふと、それも馬鹿らしくなって、家の者に言いつけ、お酒を

お爛かんさせ、小さいさかすき盃でチビチビ二合くらい飲んでみた。そうして私は、実に非常なる感慨にふけた。

お酒は、それは、お爛して、小さい盃でチビチビ飲むものにきまっている。当り前の事である。私が日本酒を飲むようになったのは、高等学校時代からであったが、どうも日本酒はからくて臭くて、小さい盃でチビチビ飲むのにさえ大いなる難儀を覚え、キュラソオ、ペパミント、ポオトワインなどのグラスを気取った手つきで口もとへ持つて行って、少しくなめるとい種族の男で、そうして日本酒のお銚子ちょうしを並べて騒いでいる生徒たちに、嫌悪けんおと侮蔑ぶべつと恐怖を感じていたもので

あつた。いや、本当の話である。

けれども、やがて私も、日本酒を飲む事に馴なれたが、しかし、それは芸者遊びなどしている時に、芸者にあなどられたくない一心から、にがいにかいと思いつつ、チビチビやって、そうして必ず、すつくと立つて、風の如く御不浄に走り行き、涙を流して吐いて、とにかく、必ず呻うめいて吐いて、それから芸者に柿などむいてもらつて、真蒼まっさおな顔をして食べて、そのうちにだんだん日本酒にも馴れた、といはな甚はなだ情無い苦行の末の結実なのであつた。

小さい盃で、チビチビ飲んでも、既にかくの如き過

激の有様である。いわんや、コップ酒、ひや酒、ビールとチャンポンなどに到つては、それはほとんど戦慄せんりつの自殺行為と全く同一である、と私は思い込んでいたのである。

いつたい昔は、独酌でさえあまり上品なものではなかつたのである。必ずいちいち、お酌しやくをさせたものなのである。酒は独酌に限りますなあ、なんて言う男は、既に少し荒すさんだ野卑な人物と見なされたものである。小さい盃の中の酒を、一息にぐいと飲みほしても、周囲の人たちが眼を見はつたもので、まして独酌で二三杯、ぐいぐいつづけて飲みほそうものなら、まずこ

これはヤケクソの酒乱と見なされ、社交界から追放の憂目うれきめに遭あつたものである。

あんな小さい盃で二、三杯でも、もはやそのような騒ぎなのだから、コップ酒、茶碗酒などに到つては、まさしく新聞だねの大事件であつたようである。これは新派の芝居のクライマックスによく利用せられていて、

「ねえさん！ 飲ませて！ たのむわ！」

と、色男とわかれた若い芸者は、お酒のはいつているお茶碗を持って身悶みもたえする。ねえさん芸者そうはさせじと、その茶碗を取り上げようと、これまた身悶え

して、

「わかる、小梅さん、気持はわかる、だけど駄目。茶碗酒の荒事あらしごとなんて、あなた、私を殺してからお飲み。」

そうして二人は、相擁あいようして泣くのである。そうしてその狂言では、このへんが一ばん手に汗を握らせる、戦慄と興奮の場面になっているのである。

これが、ひや酒となると、尚なほいつそう凄惨せいさんな場面になるのである。うなだれている番頭は、顔を挙げ、お内儀のほうに少しく膝ひざをすすめて、声ひそめ、

「申し上げてもよろしゅうございますか。」

と言う。何やら意を決したもののようである。

「ああ、いいとも。何でも言っておくれ。どうせ私は、あれの事には、呆あきれはてているのだから。」

若旦那の不行跡に就ついて、その母と、その店の番頭が心配している場面のようなのである。

「それならば申し上げます。驚きなすつてはいけませんよ。」

「だいじょうぶだってば！」

「あの、若旦那は、深夜台所へ忍び込み、あの、ひやぎけ、……」と言いも終らず番頭、がっぱと泣き伏し、お内儀、

「げえっ！」とのけぞる。木枯しの擬音。



ほとんど、ひや酒は、陰惨きわまる犯罪とせられていたわけである。いわんや、焼酎しょうちゆうなど、怪談以外には出て来ない。

変れば変る世の中である。

私をはじめて、ひや酒を飲んだのは、いや、飲まされたのは、評論家古谷綱武君の宅に於おいてである。いや、その前にも飲んだ事があるのかも知れないが、その時の記憶がイヤに鮮明である。その頃、私は二十五歳であつたと思うが、古谷君たちの「海豹」という同人雑誌に参加し、古谷君の宅がその雑誌の事務所という事になつていたので、私もしばしば遊びに行き、古谷君

の文学論を聞きながら、古谷君の酒を飲んだ。

その頃の古谷君は、機嫌のいい時は馬鹿にいいが、悪い時はまたひどかった。たしか早春の夜と記憶するが、私が古谷君の宅へ遊びに行ったら古谷君は、

「君、酒を飲むんだろう？」

と、さげすむような口調で言ったので、私も、むつとした。なにも私のほうだけが、いつもごちそうのなりっ放しになっていゝるわけではない。

「そんな言いかたをするなよ。」

私は無理に笑つてそう言った。

すると古谷君も、少し笑つて、

「しかし、飲むんだらう？」

「飲んでもいい。」

「飲んででもいい、じゃない。飲みたいんだらう？」

古谷君には、その頃、ちよつとしつつこいところがあつた。私は帰ろうかと思つた。

「おうい。」と、古谷君は細君を呼んで、「台所にまだ五ん合くらいお酒が残っているだらう。持つて来なさい。瓶びんのままでもいい。」

私はも少し、いようかと思つた。酒の誘惑はおそろしいものである。細君が、お酒の「五ん合」くらいはいつている一升瓶を持つて来た。

「お爛かんをつけなくていいんですか？」

「かまわないだろう。その茶呑茶碗にでも、ついでやりなさい。」

古谷君は、ひどく傲然ごうぜんたるものである。

私も向つ腹が立っていたので、黙つてぐいと飲んだ。私の記憶する限りに於ては、これが私の生れてはじめての、ひや酒を飲んだ経験であつた。

古谷君は懐手ふところして、私の飲むのをじろじろ見て、そうして私の着物の品評をはじめた。

「相変らず、いい下着を着ているな。しかし君は、わざと下着の見えるような着付けをしているけれども、

それは邪道だぜ。」

その下着は、故郷のお婆さんのおさがりだった。私は、いよいよ面白くない気持で、なおもがぶがぶ、生れてはじめてのひや酒を手酌で飲んだ。一向に酔わない。

「ひや酒つてのは、これや、水みたいなものじゃないか。ちつとも何とも無い。」

「そうかね。いまに酔うさ。」

たちまち、五ん合飲んでしまった。

「帰ろう。」

「そうか。送らないぜ。」

私はひとり、古谷君の宅を出た。私は夜道を歩いて、ひどく悲しくなり、小さい声で、

わたしや

売られて行くわいな

というお軽の唄をうたった。

突如、実にまったく突如、酔いが発した。ひや酒は、たしかに、水では無かった。ひどく酔って、たちまち、私の頭上から巨大の竜巻が舞い上り、私の足は宙に浮き、ふわりふわりと雲霧の中を掻きわけて進むというあんばいで、そのうちに転倒し、

わたしや

売られて行くわいな

と小声でつぶや呟き、起き上って、また転倒し、世界が自分を中心にもとまらぬ速さで回転し、

わたしや

売られて行くわいな

その蚊かの鳴くが如き、あわれにかぼそいわが歌声だけが、はるか雲煙のかなたから聞えて来るような気持ち、

わたしや

売られて行くわいな

また転倒し、また起き上り、れいの「いい下着」も

何も泥まみれ、下駄を見失い、足袋たびはだしのままで、電車に乗った。

その後、私は現在まで、おそらく何百回、何千回となく、ひや酒を飲んだが、しかし、あんなにひどいめに逢った事が無かった。

ひや酒に就いて、忘れられないなつかしい思い出が、もう一つある。

それを語るためには、ちよつと、私と丸山定夫君との交友に就いて説明して置く必要がある。

太平洋戦争のかなりすすんだ、あれは初秋の頃であつたか、丸山定夫君から、次のような意味のおたよ



りをいただいた。

ぜひいちど訪問したいが、よろしいだろうか、そうしてその折、私ともう一人のやつを連れて行きたい、そのやつとも逢つてやつては下さるまいか。

私はそれまでいちども丸山君とは、逢つた事も無いし、また文通した事も無かつたのである。しかし、名優としての丸山君の名は聞いて知っていたし、また、その舞台姿も拝見した事がある。私は、いつでもおいで下さい、と返事を書いて、また拙宅に到る道筋の略図なども書き添えた。

数日後、丸山です、とれいの舞台上で聞き覚えのある

特徴のある声が、玄関に聞えた。私は立つて玄関に迎えた。

丸山君おひとりであった。

「もうひとりのおかたは？」

丸山君は微笑して、

「いや、それが、こいつなんです。」

と言つて風呂敷から、トミイウイスキイの角瓶を一本取り出して、玄関の式台の上に載せた。洒落しやれたひとだ、と私は感心した。その頃は、いや、いまでもそうだが、トミイウイスキイどころか、焼酎でさえめつたに我々の力では入手出来なかつたのである。

「それから、これはどうも、ケチくさい話なんです、これを半分だけ、今夜二人で飲むという事にさせていただけたいんですけど。」

「あ、そう。」

半分は、よそへ持つて行くんだろう。こんな高級のウイスキーなら、それは当然の事だ、と私はとつさに合点して、

「おい。」

と女房を呼び、

「何か瓶を持つて来てくれないか。」

「いいえ、そうじゃないんです。」

と丸山君はあわて、

「半分は今夜ここで二人で飲んで、半分はお宅へ置いて行かせていただくつもりなんです。」

私は、丸山君をいよいよ洒落たひとだ、と唸<sup>うな</sup>るくらいに感服した。私たちなら、一升さげて友人の宅へ行ったら、それは友人と一緒にたいらげる事にきめてしまっていて、また友人のほうでも、それは当然の事と思つてゐるのだ。甚だしきに到つては、ビールを二本くらい持参して、まずそれを飲み、とても足りっこ無いんだから、主人のほうから何か飲み物を釣り出すという所謂、海老鯛<sup>えびたい</sup>式の作法さえ時たま行われている

のである。

とにかく私にとって、そのような優雅な礼儀正しい酒客の来訪は、はじめてであつた。

「なあんだ、そんなら一緒に今夜、全部飲んでしまひましょう。」

私はその夜、実にたのしかった。丸山君は、いま日本で自分の信賴しているひとは、あなただけなんだから、これからも附合つてくれ、と言ひ、私は見つともないくらいそりかえつて、いい気持になり、調子に乗つて誰彼を大声で罵倒ばとうしはじめ、おとなしい丸山君は少しく閉口の気味になつたようで、

「では、きょうはこれくらいにして、おいとまします。」  
と言った。

「いや、いけません。ウイスキーがまだ少し残っている。」

「いや、それは残して置きなさい。あとで残っているのに気が附いた時には、また、わるくないものですよ。」

苦勞人らしい口調で言った。

私は丸山君を吉祥寺駅まで送って行って、帰途、公園の森の中に迷い込み、杉の大木に鼻を、イヤというほど強く衝突させてしまった。

翌朝、鏡を見ると、目をそむけたいくらいに鼻が赤

く、大きくはれ上っていて、鬱々として楽しまず、朝の食卓についた時、家の者が、

「どうします？　アペリチーフは？　ウイスキーが少し残っていてよ。」

救われた。なるほど、お酒は少し残して置くべきものだ。善い哉、かな丸山君の思いやり。私はまったく、丸山君の優しい人格に傾倒した。

丸山君は、それから、私のところへ時々、速達をよこしたり、またご自身迎えに来てくれたりして、おいしいお酒をたくさん飲めるさまさまの場所へ案内した。次第に東京の空襲がはげしくなったが、丸山君の

酒席のその招待は変る事なく続き、そうして私は、こ  
んどこそ私がお勘定を払って見せようと油断なく、そ  
れらの酒席の帳場に駆け込んで行っても、いつも、「い  
いえ、もう丸山さんからいただいたいております。」という  
返事で、ついに一度も、私が支払い得なかったという  
醜態ぶりであった。

「新宿の秋田、ご存じでしょう！ あそこでね、今夜、  
さいごのサーヴィスがあるそうです。まいりましよ  
う。」

その前夜、東京に夜間の焼夷弾しょういだんの大空襲があつて、  
丸山君は、忠臣蔵の討入うちいりのような、ものものしい刺子さしこ



の火事場装束で、私を誘いにやって来た。ちようどその時、伊馬春部君も、これが最後かも知れぬと拙宅へ鉄かぶとを背負つて遊びにやって来ていて、私と伊馬君は、それは耳よりの話、といさみ立つて丸山君のお伴ともをした。

その夜、秋田に於いて、常連が二十人ちかく、秋田のおかみは、来る客、来る客の目の前に、秋田産の美酒一升瓶一本ずつ、ぴたりぴたりと据えてくれた。あんな豪華な酒宴は無かつた。一人が一升瓶一本ずつを擁して、それぞれ手酌で、大きいコップでぐいぐいと飲むのである。さかなも、大どんぶりに山盛りである。

二十人ちかい常連は、それぞれ世に名も高い、といつても決して誇張でないくらいの、それこそ歴史的な酒豪ばかりであつたようだが、しかし、なかなか飲みほせなかつた様子であつた。私はその頃は、既に、ひや酒でも何でも、大いに飲める野蠻人になりさがつていたのであるが、しかし、七合くらいで、もう苦しくなつて、やめてしまった。秋田産のその美酒は、アルコール度もなかなか高いようであつた。

「岡島さんは、見えないようだね。」

と、常連の中の誰かが言つた。

「いや、岡島さんの家はね、きのうの空襲で丸焼けに

なつたんです。」

「それじゃあ、来られない。気の毒だねえ、せつかくのこないいチャンス、……」

などと言っているうちに、顔は煤すすだらけ、おそろしく汚い服装の中年のひとが、あたふたと店にはいつて来て、これがその岡島さん。

「わあ、よく来たものだ。」

と皆々あきれ、かつは感嘆した。

この時の異様な酒宴に於いて、最も泥酔し、最も見事な醜態を演じた人は、実にわが友、伊馬春部君そのひとであった。あとで彼からの手紙に依よると、彼は私

たちとわかれて、それから目がさめたところは路傍で、  
そうして、鉄かぶとも、眼鏡も、鞆かばんも何も無く、全裸  
に近い姿で、しかも全身くまなく打撲傷を負っていた  
という。そうして、彼は、それが東京に於ける飲みお  
さめで、数日後には召集令状が来て、汽船に乗せられ、  
戦場へ連れられて行ったのである。

ひや酒に就いての追憶はそれくらいにして、次に  
チャンポンに就いて少しく語らせていただきたい。こ  
のチャンポンというのもまた、いまこそ、これは普通  
のようになっでいて、誰もこれが無鉄砲なものとも何  
とも思っていない様子であるが、私の学生時代には、

これはまた大へんな荒事あらかことであつて、よほどの豪傑でない限り、これを敢行する勇気が無かつた。私が東京の大学へはいつて、郷里の先輩に連れられ、赤坂の料亭に行つた事があるけれども、その先輩は拳闘家で、中国、満洲を永い事わたり歩き、見るからに堂々たる偉丈夫、そうしてそのひとは、座敷に坐るなり料亭の女中さんに、

「酒も飲むがね、酒と一緒にビールを持って来てくれ。チャンポンにしなければ、俺おれは、酔えないんだよ。」

と実に威張つて言い渡した。

そうしてお酒を一本飲み、その次はビール、それか

らまたお酒という具合に、交る交る飲み、私はその豪放な飲みっぷりにおそれをなし、私だけは小さい盃でちびちび飲みながら、やがてそのひとの、「国を出る時や玉の肌、いまじや槍傷刀傷。」とかいう馬賊の歌を聞かされ、あまりのおそろしさに、ちつともこつちは酔えなかつたという思い出がある。そうして、彼がそのチャンポンをやつて、「どれ、小便をして来よう。」と言つて巨軀きよくをゆさぶつて立ち上り、その小山の如きうしろ姿を横目で見て、ほとんど畏敬いけいに近い念さえ起り、思わず小さい溜息ためいきをもらしたものだが、つまりその頃、日本に於いてチャンポンを敢行する人物は、ま

ず英雄豪傑にのみ限られていた、といつても過言では無いほどだったのである。

それがいまでは、どんなものか。ひや酒も、コップ酒も、チャンポンもあつたものでない。ただ、飲めばいいのである。酔えば、いいのである。酔つて目がつぶれたつていいのである。酔つて、死んだつていいのである。カストリ焼酎などという何が何やら、わけのわからぬ奇怪な飲みものまで躍り出して来て、紳士淑女も、へんに口をひんまげながらも、これを鯨飲げいりんし給う有様である。

「ひやは、からだに毒ですよ。」

など言つて相擁して泣く芝居は、もはやいまの観客の失笑をかうくらいなものであろう。

さいきん私は、からだ具合いを悪くして、実に久しぶりで、小さい盃でちびちび一級酒なるものを飲み、その変転のはげしさを思い、ぼうぜん 呆然として、わが身の下落の取りかえしのつかぬところまで来ている事をいまさらの如く思い知らされ、また同時に、身の世相風習の見事なほどの変貌が、何やら恐ろしい悪夢か、怪談の如く感ぜられ、しんに身の毛のよだつ思いをしたことであつた。



底本…「太宰治全集9」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年5月30日第1刷発行

1998（平成10）年6月15日第5刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6  
月発行

入力…柴田卓治

校正…かとうかおり

2000年1月25日公開

2005年11月6日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、  
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで  
す。